

がん治療の限界と自然療法の可能性

谷川 啓司

バイオセラクリニック院長



現在のがんに対する治療は手術を中心として、抗がん剤治療、放射線治療などがそれぞれ単独に、もしくは組み合わせ(集学的)治療として行われている。その中で抗がん剤療法の場合は、同じ治療有効と判断されている間は繰り返し、効果がなくなるか、または、あまりにも強い副作用で継続が難しくなると、異なる薬剤に変更し、使用できる薬がなくなるまで繰り返すといった事がよく見受けられる。

身体に発生したがん細胞があるとき、これは正常細胞ではない異物である以上、私たちの免疫は必ずがん細胞を排除しようと働く。しかし、免疫ががん細胞を排除する速度よりも、がん細胞が増える速度が速いので、がん細胞は結果的に増え続けてしまう。それはがん細胞が免疫によって排除されにくい性格を持っていることと、私たちの持っている免疫力を働きづらくしていることも要因にある。今でも必死にがん細胞を排除しようとしているものの、結果的にはがんの縮小をもたらせられない不十分な免疫の力を、現在より上げることができれば、がん細胞が増える速度に少しでも追いつこうとすることになる。場合によっては追いつき、追い越してがんを小さくすることも可能かもしれない。したがって、がんに対する免疫力を上げることは、どんな状態であっても、必ず私たちに有利に働く。この免疫力を上げるためには、がん自身が持っている免疫に抵抗する性格について対策をたて、そして自分自身が免疫を下げている理由などに十分対策を立てることで、少しでも改善することができる。そして、自然療法をはじめとする補完代替医療も、その改善に十分貢献できると考えられる。

本セミナーでは、下記の項目を中心にがんと免疫の関係を整理するとともに、我々が免疫力を上げる方法として実践している自然療法の中から、シイタケ菌糸体エキスをを用いた臨床研究データを報告するとともに、がんと免疫の最新トピックである免疫抑制細胞についても紹介し、がん治療における自然療法の可能性について述べたい。

- がんの本質は何か？
- がんに対する免疫の重要性、免疫抑制細胞
- がんと自然療法
- シイタケ菌糸体エキスの臨床研究

我々は自然療法の中で、最近シイタケ菌糸体エキスをに着目し臨床研究を行った。シイタケ菌糸体エキスは、

腫瘍誘導性の免疫抑制性細胞の一つである Treg の抑制作用を持ち、免疫療法との併用効果が期待されている。そこで我々は、免疫細胞療法施行がん患者におけるシイタケ菌糸体エキス摂取の免疫能及び QOL に及ぼす影響を検討した。免疫細胞療法を施行した悪性腫瘍患者 10 例を対象とした。4 週間は免疫細胞療法単独、次の 4 週間をシイタケ菌糸体エキス経口摂取(1800mg/day)の併用とした。試験開始時、4 週後、8 週後に QOL 調査及び免疫パラメータを測定した。結果、QOL スコアは免疫細胞療法単独時に比べシイタケ菌糸体エキス併用時に改善が観察された。免疫パラメータは 4 週間のシイタケ菌糸体エキス併用の前後で、末梢血産生 IFN γ 量が上昇傾向を示し、この上昇と Treg(FoxP3+/CD4+)の変動に関連が示唆された。以上のことから、免疫細胞療法にシイタケ菌糸体エキスを併用することで、QOL 及び免疫能が改善する可能性が示唆された。また免疫抑制因子や免疫抑制細胞が、実際の患者の免疫力を反映していることがわかってきた。

プロフィール

- 1990年 3月 防衛医科大学卒業
- 4月 東京女子医科大学消化器外科入局
- 1996年 3月 東京女子医科大学消化器外科医療練士修了 消化器外科助手
- 4月 米国ミシガン大学腫瘍外科において免疫細胞療法、遺伝子治療の研究にresearch fellowとして従事 CTL療法、癌ワクチン、樹状細胞ワクチンの研究に携わる
- 1998年 4月 同ミシガン大学腫瘍外科のsenior research fellowとして同研究を継続しつつ、同大学の医師・大学院生を指導
- 1999年 8月 米国ミシガン大学senior research fellow終了
- 9月 東京女子医科大学消化器外科帰局
- 以後、東京女子医科大学消化器外科において外科医としてだけでなく癌免疫細胞療法チームとして癌免疫細胞療法の臨床研究に携わる
- 樹状細胞ワクチン、樹状細胞腫瘍内局注療法など多数の臨床試験を開始
- 2001年 5月 東京女子医科大学医学博士号取得
- 8月 癌免疫細胞療法施設バイオセラクリニックを開設
- 2007年 5月 東京女子医科大学消化器外科講師(非常勤)

共催：小林製薬株式会社